

# 寄託文書紹介 6

## 小貫敏尾家文書

茨城県との境にある旧小貫村(現在は茂木町の一部)で代々名主役を勤めた小貫家には、膨大な史料が保存されていて、現在は県立文書館に寄託され、その数は約六千点にもおよんでいます。

この小貫村は、八溝山地の中にあつて四方を比較的低い山々に囲まれています。中央を逆川が北流しているため、川沿いに水田が開け、田畑のバランスがとれた農村として、江戸時代には約千四百

石の大村でした。しかし、江戸時代初期に上・中・下の三か村に分郷されています。

最初幕府の直轄地(天領)となりましたが、大名領や旗本知行所に分割されて支配されるようになります。江戸時代中期(宝暦六年)からは天領と四人の旗本知行所に分かれて固定されました。

この天領分の名主を勤めたのが小貫家です。したがって小貫家文書は、典型的な名主文書であり、江戸時代の農村の様子を雄弁に語ってくれる貴重な史料です。

すでに、小貫家文書を利用した歴史研究は相当すすんでおり、『栃木県史』でも重要な文書として大

量に利用され、その分析の成果が発表されています。特に小貫家文書は有名にしたのは、何と言つても大量の「農書」の存在です。

小貫家は、村の指導者である一方、また一人の農民でもあります。小貫村では最大の農地を経営する農家ですが、その所持高は、江戸時代初期で約五十石、中期には約百石、後期には約六十石の小規模地主農家でした。この延宝期を頂点とする土地の集積とそれ以後の減少を契機として、小貫家の経営もまた変化せざるを得なくなりしました。そこに、歴代の小貫家の当主が農業経営の基礎となる農事日誌をはじめとする詳細な記録を集積していく理由があつたのです。

現在小貫家文書の中には、一七八三年(天明三年)の「万覚」をはじめ数十冊の農事帳が残されていて、これらの分析を通じて江戸時代の農村社会が徐々に明らかになってきています。

また、この「農書」を作成した小貫家の中でも中心となつた十二代当主小貫万右衛門は、自分の農家経営の経験を「農家捷徑抄」という題で一八〇八年(文化五年)に書き著しています。ここには、農業関係ばかりでなく万右衛門の深い人生観や教育観・社会観が示されていて、思想的観点からも

注目されています。以上の外、小貫家文書には、検地帳をはじめ村の生活そのものあり方を示す史料が大量に存在し、それは明治時代に戸長や村長を歴任した時の史料とともに、近代につながっています。(仲田凱男)

一六七七年(延宝五年)の検地帳の写



小貫家に残された「農書」の一部

の分析の成果が発表されています。特に小貫家文書は有名にしたのは、何と言つても大量の「農書」の存在です。小貫家は、村の指導者である一方、また一人の農民で

